

肥瘦と右手気口脈の浮沈の順逆関係から見た予後の考察1

吉岡広記¹ 山田恵美¹

1) 吉岡鍼灸院

【目的】気口脈が沈となり不調の度を増した瘦人2名の症例から肥瘦と脈状の順逆の意義を考察する。

【対象 A】37歳男性。自営業。どこかひ弱で感情が顔に出やすい。不規則な生活を送り、常に寝不足する。治療は週に3回ほど。日頃は、人迎気口診：虚燥痰燥の順(気口脈浮数)で推移。X年11月に結婚。X+5年2月、4日ほど便通がなく急に激しい右側頭痛に襲われ、3日後に便通とともに解消。この間の脈證は日頃と同じであった。以降、2~3ヶ月に1回ほど同様の症状が発症するようになる。X+6年にはほぼ毎月となり、その際に気燥痰燥の順(気口脈沈数)となる時があった。X+7年には、常に気燥痰燥の順となり、多い時には月に2~3回となる。11月下旬には便通があるにも関わらず発症するようになり、その最中は気燥痰燥のやや順となる。なお、頭痛発症時に外出すると一気に解消することがしばしばあったが、この頃から逆に悪化するようになる。X+8年7月に離婚し、以前の虚燥痰燥の順に戻るとともに、頭痛は発症しなくなった。

【対象 B】41歳女性。会社員。緊張しやすく、どこことなく哀しげな雰囲気漂う。治療は週に1回。日頃は、虚勞寒湿の順(気口脈浮遅)で推移。Y年10月、転勤となり通勤が徒歩(15分)から電車(2時間)へと変わり、気虚寒湿の順またはやや逆(気口脈沈遅)となる。11月以降、残業が続き、気燥痰燥の順が多くなる。Y+4年1月以降、自然災害の影響で常に残業(終電の帰宅)となり、治療は一時中断となった。Y+6年2月、子宮体癌、Y+7年9月卵巣癌(原発性)。Y+8年7月より治療を再開し、気燥痰燥の順で推移。

【考察】Aは結婚、Bは転勤という環境の変化による内傷が原因であり、それは気口脈が浮から沈へと転換したことに現れていると判断された。Aは離婚を期に浮へと移行し安定するも、Bは2度の手術を経てもなお逆證を呈し、かつ数脈を伴っているため、今後の按じられる。

【結語】瘦人は気口脈浮を順とするため、長期にわたる逆證は注意を要する。

肥瘦と右手気口脈の浮沈の順逆関係から見た予後の考察2

山田恵美¹ 吉岡広記¹

1) 吉岡鍼灸院

【目的】気口脈が浮となり予後不良となった肥人3名の症例から肥瘦と脈状の順逆の意義を考察する。

【対象 C】52歳男性。会社員。声やや低く嘔れ、色黒。初診 X年6月1日。3日前、運動中に左腰が痛みだし、翌朝より劇化。脈證は虚勞寒湿の順。2~3日は気虚寒湿のやや逆となり、やや軽減。4日以降、再び虚勞寒湿となり左踵の痛みと左腰下肢の痺れが加わり、入院。X+1年4月5日の夜に再発。11日より治療開始。14日まで虚勞寒湿(治療後の脈状変化なし)で推移し、15日には虚勞虚寒(人迎浮)のやや順となり悪化。入院。

【対象 D】51歳男性。会社員。声大きく太い、色黒。初診 Y年4月。治療は週5回。残業のため1日2~3時間の睡眠を続けてきた。昨年4月より職場の人間関係悪化、8月に適応障害と診断、休職。虚燥痰燥の順。5月以降、治療後に気口脈が沈むようになるが、治療前は当初の脈證で推移。6月下旬より虚勞寒湿の順となり、徐々に軽減。Y+1年1月に復職。多忙のため虚燥痰燥に戻り、やや悪化。Y+2年4月、仕事を軽減。虚勞寒湿の順となり落ち着くも、いまだ完治せず。

【対象 E】50歳男性。SE。目が細く、声高く嘔れ、色黒。初診 Z年5月。治療は週1回。昔から週の半分ほどは徹夜。半年前から首の違和感と転筋(昼は手の中指、夜は右ふくらはぎ)を発症、3ヶ月前から左肩前面が痛みだす(夕方最悪)。虚燥風燥(人迎浮)。8月まで虚燥痰燥(治療後の脈状変化なし)で推移するも左肩前面の痛みは次第に肘へと広がる。9月以降は再び虚燥風燥となり、足のむくみが加わる。10月に糖尿病と診断、12月に急激に痩せ、入院。

【考察】DEは、主に過労による極度の陰虚が原因である。気口脈が浮かつ数を伴い、治療後に沈まないことから判断される。Cの原因は不明だが、遅であることからDEほど重度ではないと考えられる。ただし、人迎脈浮の時は、遅であつても虚極と見なされるため、病状は重い。

【結語】肥人は気口脈沈を順とするため、長期の逆證は予後不良と推定される。